

四月廿日、全身高度ノ衰弱ニ陷リ、兩三日來兩足ノ浮腫

ヲ認メタリ、頸ハ約四十五度ノ左斜傾ヲナシ脊柱從テS

字狀側彎ヲ呈ス、右頸ノ腫脹ハ著大ニシテ切開口ヨリノ分泌ハ殆ンド停止セリ、左頸ハ今ヤ平坦ニシテ切開創ハ小創トシテ遺残シ其中央ノ瘻孔及其近部ノ二箇ノ瘻孔ヨリ常ニ少許ノ含顆粒分泌有リ、背創痕ハ猶汚穢灰白色弛

鈍肉芽ヲ有セル瘻孔ヲ止メ分泌ハ殆ンド停止ス、其下部ノ腫起ハ變化ナシ、輕度ノ乾咳有リ、患者ハ此クノ如キ状態ニテ催眠剤ヲ用ヰズ就眠セシガ、夜中二時頃尿利ノ爲メ醒覺セシヨリ、後頓ニ言語意ニ任セザルガ如ク次テ意識ハ昏朦トナリ、後再ビ醒メズ、

五月一日、早曉終ニ黃泉ノ客トナル

羅患中ノ内服ニハ砒鐵丸ヲ持長シ催眠剤并ニ鎮痛劑ニハスルフオナール、塗酸モルヒチ、塗酸ヘロイン、安知必北等ヲ處セリ、

拙筆ニ當リ此報告ヲ快諾セラレタル林院長ノ好意ヲ謝ス

明治三十九年五月十五日

◎ミコシンヘン大學婦人科クリニツクニ於ケル穿顱術及碎頭術ニ就テ  
ニ於ケル穿顱術及碎頭術ニ就テ

(論 説) ミコシンヘン大學婦人科クリニツクニ於ケル穿顱術及碎頭術ニ就テ 七

唐木保三著

醫科四年生 石塚良策譯

本文ハ在獨逸唐木保三君ノ寄贈原著ヲ譯述シタルモノニシテ未ダ著者ノ校閲ヲ經ザルモノナレバ若シ其意義ニ於テ誤謬ノ箇所モアラバ其責ハ譯者ニ在リ茲ニ一言御斷リ申置ク也

蓋シ手術トシテ穿顱術ノ如ク古代ヨリ最多ク記載セラレ且其手術ハ道徳上及法律上果タシテ正鷦ヲ得タルモノナルヤ否ニ就キ種々論議セラレタル手術アラザルベシ而シテ既ニ古昔ニ於テハ碎斷的手術行ハレひばくらてす(紀元前四六〇—三七七)ハ頭蓋開口ニ用ヒ得ベキ創状部(Gingivalium)ト又頭蓋碎破ノ目的ヲ以テ Osteopony ト稱スル器械ヲ用ヰタリキ降テ紀元後一世紀トナリ Celsus 氏ハ鉤ヲ記載シ Goran 氏ハ頭蓋骨ノ切除法ヲ詳述シ又彼ノアルブカセーメス氏ノ成書中ニハ頭蓋短縮ニ要シタルガ如

キ圖ヲ認ム即チ其死胎挾出篇ニハアラビヤ人ニヨリ頭蓋穿開術ニ應用セラレタル所ノ多クノ器械ヲ記載セリ此縮少手術ハ勿論其多クノ場合ニ可及的胎兒ヲ生キナガラ分娩セシムントスル穩健ナル手術發見セラレシ以來自然ニ著シク限局セラレテ後進頭部挽出術及足位回轉術ヲ助ケ

ントスル鉗子ノ應用其他又帝王切開術及耻骨離開術等起  
ヘリ而メ足位回轉術ハ未だヒボクラテス時代ハ知ラレバ  
シテ Celsus 氏始テ之ヲ記載セリ然レバ之レ只死胎ノ場合  
ニノミ應用セラレシガ其後 Soranus 出テ當時ノ產婆ニモ  
フルニ此足位回轉術ヘ唯死胎ノ場合ノミナラズ生胎ニモ  
亦應用スペキモノナルモノナルヲ以テシタルヲ以テ大  
ニ發達進歩シ爾來之ノ方法ヘ一段ニ廣ク施行セラレシガ  
漸ク衰エアラビヤ人ガ跋扈セシ當時ニ至リテハ殆ト全ク  
忘却セラレキ然レバ其後一五一三年ニ至リ再ヒ Euhar-  
ius 氏ニヨリ著書 Rosengarten 中ニ記載セラレ Pare 氏自  
己ノ經驗ニ從ハベ之ノ足位回轉術ハ更ラニ手術中ニ採用  
スペキモノナルコトヲ唱導セシ結果廣ク採用セラルニ  
至リシ其ノ功績ヘ永ク Ambroise Paré (五九〇) ニ歸セリ  
而メ氏及氏ノ門弟ニヨリ之ノ回轉術ハ實ニ重大ナル進歩  
トセラレ產科學上最早永久ニ消滅セザルモノトナレリ  
後進頭部挽出法ベ Maniceau, Leveret, Smellie Lachapelle-  
und Veit 諸氏ニヨリ始メテ實行セラレタル口項手技ニヨ  
ルモ或ヘ又口腔頭蓋手技ニヨルモ行ヒ得ルモノリシテ此  
ノ沿革ハ明カニ Celsus 及ヒ J. guillemeau 二氏ニ始マル  
然レムモ此術法ヲ生胎ノ場合ニ應用シ又實際ニ應用ベシ

キモノナルコトヲ賞セシ功績ベ Wiegand, A. martin,  
Von Winkel 諸氏ニ歸セリ  
其後一七二三年ニ至リゲントノ外科學者 Palty 氏彼ノ  
Titelte ハ發見シタルヲ始メトシ此ノ思想觀念ハ忽チ諸  
國ニ傳搬セラレ英國ニ於テハ既ニ Peter chamberlen der  
Altere 氏(五六〇已里ニ生ル) 一種ノ鉗子ヲ創成シ十八世  
紀ノ中半更ハ Leveret 及ヒ Smellie 氏ニヨリ改良完備  
セラレタリ

次ニ帝王切開術モ他ノ手術ト同シク紀元前時代ヨリ行ハ  
レタルモ獨乙國ニテハ之ノ帝王切開術ヲ記載シ且實行セ  
ラタルハ一六一〇年 Trautmann 氏ニヨリ Witteberg 市  
ニ於テ妊娠子宮ヘルニヤノ場合ニ施行セラレシヲ嚆矢ト  
ス而シテ氏ヘ曰ク此ノ手術ハ實ニ危急存亡ノ場合ニ於テ  
ノミ應用セラレタレドモ主トシテ良好ナル成績ヲ收ムル  
コトハ實ニ稀有ニ属シ從テ死亡亦殆ンド免ルカラズト  
期ニ於テモ尙此ノ手術ハ驚クベキ死亡數ヲ有セリ  
耻骨離開術モ亦初メハ生胎ノ穿顎術ヲ節減セントスル目  
的ヲ以テ應用セラレタリ即チ此手術ハ一七六八年 Ligau-  
dit 氏ニヨリテ提案セラレ十八世紀ノ末期ニ至リ屢應用

セラレタンドモ其後漸々閑却セラレ一時其跡ヲ沒シント  
セシガ近時又再ビ暫時勢力ヲ挽回シ現今ニ至リ又再ヒ衰  
エタリ然レドモ其再興ニ與リテ力アリシ人ハ伊太利人ニ  
シテ殊ニギアーベル市ノ Moriani 氏ト巴里ノ Pinard 氏  
ニシテ現時ハ又耻骨切離術ト同様ノ手術ガ Gishi ノ手術  
ニヨリテ起レリ

穿顎術ヲ施ストキ往昔ハ實ニ危險ナル器械ヲ使用シタレ  
ドモ現今ハ專ラ剪刀様ノ穿顎器ヲ用ヒ或ハ又之レガ兒頭  
ノ縫合ニ到達セザルトキハ圓鋸様ノ穿顎器ヲ用フ而シテ  
分娩ノ際死胎ニシテ迅速ナル處置ヲ要セズシテ穿顎術ヲ  
施セシトキ又或ハ子宮口全ク完全ニ擴張セザルトキヘ胎  
兒ノ掏出ヲシテ自然ノ經過ニ任ズベシ然レドモ多クハ穿  
顎術ヘ速カニ分娩ノ終了ヲ要スルトキ或ハ自ラノ工夫ニ  
ヨリ之ヲ施セバ都合ヨシト思フトキ執行セラル・モノニ  
シテ產科醫ハ其際穿顎術ニ次グニ直チニ掏出術ヲ要スベ  
シ而シテ要手掏出術ハ唯稀ニ可能的ナルヲ以テ此ノ術法  
ヲ容易ナラシメシガタメ種々ノ器械ヲ構成セラル即往時  
く Baudelocque 氏ノ考案ニナリシ碎頭力 Kephaloscriptor ヲ  
用ヒタリキ然レドモ現今ハ實際ノ手術上 Simpson 氏  
リ始メテ實地使用セラレタル Klanjoklasten ヲ用フルカ

或ハ又 Winkel 氏改良ノ Mennard 氏頭蓋鉗子ヲ用フ其  
他又 Auvard 氏考案ノ器械モ亦適用セラル而シテ之ノ器  
械ハ穿顎器碎頭器及頭蓋摘出器ヲ合体セラレタルモノニ  
シテ何レニモ適用スルコトヲ得ルモノナリ

次ニ予ハ簡單ニ獨乙大學ニ於ケル穿顎術數其他又特ニ知  
ラレタル著明ノ手術ヲ比較セント欲ス然レドモ予ハ茲ニ  
防腐制腐期以前ノ諸例ヲ引用シテ後年ノ諸例ト比較セン  
ト欲スルモ之レ無用ノ業ナルガ故ニ之ヲ省ク即チ

Bern 1868-1877 即チ十年間ノ穿顎術數三十一例ノ中

死亡數五例即チ一六、一%

Bern 一八七八—一八八九年即チ十二年間ノ穿顎術二  
十九例中死亡七例即チ二四、一%

而シテ尙之ヲ時代のニ排列スル時ハ次ノ如シ

Marburg 一八八六—一八九二年間ニ於テ約六千ノ分娩  
中五十二ノ穿顎術ヲ施セリ即チ其割合〇、八七%ナリ  
トス

次ニ又之ト同時期ニ於ケル著明ノ事實アリ

Berlin (Gutserow) ..... 1.10%  
Berlin (Olshausen) ..... 0.95%

Dresden

1.29%

Halle 1.18%  
Leipzig 1.77%  
Wien I geb-klinik 0.75%  
Wien II geb-klinik 0.32%

Zürich 2.04%  
又他ノ論說ニ依ルトキハ穿顎術ノ成績ニ就キ次ノ如キ報告ナリ

Halle 千八百八十七年一同九十七年間入院患者總數三千八百五十七人ノ分娩中穿顎術ヲ施セシヤノ四十二例即チ一、〇九%ノ割合ナリ

同 外來患者五千八百三十六ノ分娩中穿顎術ヲ施セシヤノ八十三例即チ一、四二%ノ割合ナリ

故ニ一八八七年四月一日ヨリ同九十七年八月一日ニ至ルマテノ分娩總數ハ九千六百九十三ニシテ其中穿顎術百二十五例アリ即チ其割合一、二九%ニ當ル  
又 Greifswald 大學ニ於テハ一八九九年ヨリ千九百三年二月マテニ取扱シ分娩數三千三百三十七例ノ中十七回ノ穿顎術ヲ施シタルコトヲ報告セリ故ニ一、二七%ノ割合ニ相當ス

父之ニ關スルボン大學ニ於テハ一八九三年四月一日ヨリ

一九〇一年四月一日ニ至ルマテ其間施行シタル穿顎術ハ總數四千百九十八回ノ分娩中五十六例即チ一、三三%ニシテ次ノ如タ之ヲ區別スベシ

年 度	分 娩 數	穿 顎 術	百 分 比
1893-94	513	1	0.19%
1894-95	477	3	0.63%
1895-96	517	6	1.16%
1896-97	510	9	1.76%
1897-98	535	12	2.24%
1898-99	525	6	1.14%
1899-00	591	11	1.86%
1900-01	530	8	1.50%

以上ノ統計ニ徴シ著者ハ此ノ穿顎術ハ分娩總數ト比較シテ前年ヨリモ後年ニ至ルニ從ヒ益々多ク行ハル、コトヲ斷定スカクノ如キ傾向ヲ有スル事柄ハ何カ爲メニ然ルカト相像スルニ現今ハ多クノ場合ニ於テ碎頭術ナルモノハ其他ノ同様ノ手術殊ニ鉗子應用ノ手術ヲ撰ブガ故タメナルベシ而シテ若シ狹隘骨盤ニシテ貽兒既ニ死亡シ或ハ又分娩中死亡セシトキ之ノ穿顎術ヲ施スコトハ母体ニ向テ最須要ニシテ且幸福ナル手術ナリト断定セラル

次二年ハ結論トシテミコソヘン大學ノ比較統計ニ就テ講究シ次ニ一九〇〇—一九〇五年間ニ說明ヲ與ハラレタル

四十九例ヲ短表トナシ簡單ニ之レガ排列ヲ試ミン

年 度 及 日 誌 番 號	人 名 年 齡 及 分 娩	既 住 分 娩	骨 盤	長	胎 兒 位 置	既往 ノ手術	穿 顱 術 ノ適應症	生 死 ノ別	身 長 及 休 重	性 体 ノ經 過
一九〇〇 四六號	Josephine Sch.	—	棘結合線 外結合線 對角線	二四、〇仙 二六、〇仙 二一、〇仙	第一 位	回轉術無効	心音 強盛	死	身長五〇仙 体重二九五 ○瓦	產後無熱
一九〇〇 五四九號	Marie K.	分娩一回	棘結合線 外結合線 骨盤周圍	二七、〇仙 二八、〇仙 二五、〇仙 二九七、〇仙	第一 位	強陳痛アリ シニモ不拘 分娩安靜	心音 強盛	死	身長五〇仙 体重三三〇 ○瓦	產後無熱
一九〇〇 五四八號	Marie Gl.	分娩三回	一回ハ穿顱 術ヲ施シ行 フ	二四、五仙 二六、五仙 二七、〇仙 二八、五仙	第一 位	強陳痛アリ シニモ不拘 分娩安靜	心音 強盛	死	身長五〇仙 体重三三〇 ○瓦	產後無熱
一九〇〇 四七三號	Margaretha R.	分娩二回	棘結合線 外結合線 對角線	二六、〇仙 二八、〇仙 二七、五仙 一一〇仙	第一 尾	脾氣	搏ナシ	死	身長五〇仙 体重三三〇 ○瓦	產後無熱
一九〇〇 五一七號	Karolina Kr.	分娩三回	棘結合線 外結合線 對角線	二三、五仙 二四、五仙 一七、五仙 一一六、六仙	第二 位	脾氣	脾帶脫ニシテ脉 子宮變縮ヲ起シ 搏ナシ	死	身長五〇仙 体重三三〇 ○瓦	產後無熱
一九〇〇 八九四號	Magdalena B.	分娩四回	棘結合線 骨盤周圍 對角線	二五、〇仙 二六、五仙 一七、五仙 一一二、〇仙	頭 蓋 第二 位	脾氣 同轉術及肩 膀胱縮ニシテ脉 搏ナシ	脾帶脫搏ナシ	死	身長五〇仙 体重三三〇 ○瓦	產後無熱
一九〇〇 三十六歲					死	死	死	身長五〇仙 体重三三〇 ○瓦	產後無熱	
					○瓦	○瓦	導入	カテートル		
					○瓦					

# 誌雜會友校

一  
諭

說

人科クリニツクニ於ケル穿顱術及碎頭術ニ就テ 十二

校友會雜誌

一九〇一 一七四號	Maria St. 二十五歲							
一九〇一 三五三號	Br. Kathi 四十二歲 分娩六回							
一九〇一 四五三號	Sina K. 二十九歲 分娩三回	正規分娩	輔助分娩 ナリキト不能	棘結合線 櫛結合線 骨盤周圍 對角線	二四、五仙 二五、〇仙 二五、〇仙 二五、〇仙	棘結合線 櫛結合線 骨盤周圍 對角線	二六、〇仙 二八、〇仙 一〇、〇仙 一一、〇仙	第二頸項 前額位 前頭頂 上昇
一九〇一 七七六號	Marie M. 二十四歲 分娩一回			棘結合線 櫛結合線 骨盤周圍 對角線	二四、〇仙 二七、〇仙 八七、〇仙 九五、〇仙	棘結合線 櫛結合線 骨盤周圍 對角線	二四、五仙 二五、〇仙 一〇、〇仙 一一、〇仙	第二頸項 第二頭 第二位 無効ナリキ
一九〇一 六五號	Käthie S. 二十一歲 分娩一回			蓋 第二頭 及第一頭	第一頭 (第一頭蓋 位)	回轉術無効	体温二九、三脉 數百四十二	回轉術 壓迫現象及体温 上升
一九〇一 九四號	Josephia F. 三十四歲 分娩一回	對角線 一一、五仙	蓋 第二頭	前頭項位	試穿顎術 ニシテ其行ヘリ	回轉術施行ノ際 死亡ス	搏微弱ニシテ其 死	回轉術 無効ナリキ
					Parrot 氏手術			
死 死後 死後 死後	子宮縮縮輪アリ 心音ナシ 体重三一九五 強直ヲ起	子宮 攀 縮	鉗子應用 (但シ Brüts 氏鉗子)	高度ノ浮腫ヲ起 シ心音ナシ	子宮變縮アリ心 音不明	死 死 死 死 死 死 死	身長五〇仙 体重三三〇 五瓦 身長五三仙 体重三一八 五瓦 身長四九仙 体重二八五	身長五四仙 体重四五 ○瓦 悪肺炎ノ 後腐敗性 ノ発見セ リ

一九〇一 一〇九號	Anna M. 三十一歲				第二兒以下 死產	棘結合線 骨盤周圍	二七、〇仙 八七、〇仙
一九〇一 一八九號	Elise W. 二十八歲	分娩五回		第一回鉗子 後第二回分娩 第三回死產	狹隘骨盤ノ リ顎術ヲ施セ穿	棘結合線 骨盤周圍	一八、五仙 一六、〇仙
一九〇一 四五九號	Franziska Sch. 四十歲	分娩六回				棘結合線 骨盤周圍	一〇、二仙
一九〇一 四五〇號	Adelheid Sch. 二十一歲	分娩四回				蓋 第二位	蓋 第一位
一九〇一 六三九號	Philomena M. 三十二歲	分娩二回	一子ハ穿顎 術ヲ施サル ル	棘結合線 骨盤周圍	棘結合線 骨盤周圍	第二頭	鉗子應用無効
一九〇一 八四九號	Wally St. 二十六歲	分娩二回	一子ハ鉗子 應用ヲ施サ	棘結合線 骨盤周圍	蓋 第一位	第二頭	心音ナク且臍帶 脱出アリ
一九〇一 一〇五七號	Ursula W. 二十六歲	分娩二回		二六、二仙 二九、〇仙 七八、〇仙 八、五仙	棘結合線 骨盤周圍	蓋 第一位	身長五三仙 体重二九五 〇瓦
一九〇一 五七號	Anna Schr. 二十九歲	分娩二回		二六、〇仙 二〇、〇仙 二〇、〇仙 二〇、〇仙	蓋 第一位	第一頭	身長五四仙 体重三一八 〇瓦
骨盤周圍 外結合線 輪結合線		棘結合線 外結合線 輪結合線		二六、五仙 一一、五仙 仙仙仙仙	棘結合線 骨盤周圍	第二頭	身長五七仙 体重三九七 一四、〇瓦
骨盤周圍 外結合線 輪結合線		棘結合線 外結合線 輪結合線		二六、五仙 一一、五仙 仙仙仙仙	棘結合線 骨盤周圍	第一頭	身長五三仙 体重二九五 一四、〇瓦
骨盤周圍 外結合線 輪結合線		棘結合線 外結合線 輪結合線		二六、五仙 一一、五仙 仙仙仙仙	棘結合線 骨盤周圍	第一頭	大腿部ニ血 栓サ生ズ
昇シ且心音ナシ 腫ナ起シ体温上 昇		手術不全	鉗子應用無効	四五〇立方 ロイリント ルナ入ル	子宮縮縮及浮腫 ヲ起ス	死	死
昇シ且心音ナシ 腫ナ起シ体温上 昇				四五六ノメト ザリキ何トナレバ ナリシが故ナリ	不拘頭部ヲシニモ ニ出スルヲ得 シ体温三九、一 ニ達ス	生	身長四七仙 体重二九七 〇瓦
死		死		○瓦	身長五四仙 体重二七五	死	身長四五仙 体重二九七 〇瓦
死		身長五三仙 体重二八五 〇瓦		○瓦	身長五二仙 体重二八〇	生	身長五二仙 体重二八〇
惡寒戰慄アリ			セリ	卵巢炎ヲ起			

校友會雜誌

一九〇三 一一七K號	Marie D.	二十八歲	分娩一回	三回死產 一回穿顱術	棘結合線 櫛結合線 外結合線 骨盤周圍	二七、〇仙 三〇、〇仙 一九、五〇仙	前顱頂位	二回銷子體 キ無効ナリ	分娩安靜
一九〇三 六八〇號	Marie M.	三十一歲	分娩六回	ニヨル					
一九〇三 一一八號	Louise E.	二十八歲	分娩一回						
一九〇三 一一九號	Fanny Sch.	三十七歲	分娩一回						
一九〇三 一一一號	Marie L.	三十四歲	分娩二回	一回ハ穿顱 術ヲ施ス	棘結合線 櫛結合線 外結合線 骨盤周圍	二七、五仙 三〇、五仙 二〇、〇仙 一〇、六仙	第二位 第二頭 第二顏	回轉術功アリ ノ脱出シ加之耻	分娩安靜
一九〇三 一一四二號	Marie M.	二十六歲	分娩三回	サヘル出テ 術ヲ試ミ 施後第 二回及第 三回	棘結合線 櫛結合線 骨盤周圍 對角線	二四、五仙 二五、六仙 九四、〇仙 一〇、七仙	面 第二位 第二頭 第二顏	骨ノ骨盤生アリ 骨ノ骨盤生アリ	分娩安靜
一九〇四 一一一號	Helene Schl.	—	分娩一回	—	蓋	—	—	—	—
一九〇四 一一四號	—	—	—	回轉術有効 回轉術有効	開腔器ヲ用 ヒ回轉術ヲ	脐帶 搏ナシ	脐帶 捲縮	臍帶脉搏ナク且 体溫上昇シシテ	死
一九〇四 一二三甲號	Elise E.	—	—	子宮破裂ア リタメニ開 腹術ヲ施セ	脐帶脉搏ナシ	死	死	身長五〇仙 体重二四五 〇瓦	身長五四仙 体重二三〇 〇瓦
				穿顱術ニヨリ死亡	死	死	死	死	死
				死	死	死	身長四八仙 体重二二〇 〇瓦	身長五二仙 体重二三六 〇瓦	身長五三仙 体重二三〇 〇瓦
				死	死	死	—	腹部惡瘡症ナ チ伴ヒ且卵癆起 集炎ナ	—



一九〇五年 八月號	Marie G. 三十五歲 分娩三回	第一回ハ鉗子手術ニヨリ第三次回ハ流産ニヨリ分娩ス	棘結合線 櫛結合線 外結合線 骨盤周圍	二四、〇仙 二六、五仙 二七、〇仙 七六、〇仙	陣痛強烈ナリシ ニモ不拘分娩安	死 ○瓦	身長五二仙 体重二九〇
一九〇五年 九月號	R. Pauline 二十六歲 分娩二回	棘結合線 櫛結合線 骨盤周圍	二八、五仙 九〇、〇仙 一一、五仙	二六、〇仙 九〇、〇仙 一一、五仙	二八、五仙 九〇、〇仙 一一、五仙	死 ○瓦	身長五二仙 体重二九〇
一九〇五年 十月號	K. Kathi 十六歲 分娩一回	棘結合線 骨盤周圍	二八、五仙 九〇、〇仙 一一、五仙	二六、〇仙 九〇、〇仙 一一、五仙	二八、五仙 九〇、〇仙 一一、五仙	死 ○瓦	身長五二仙 体重二九〇
以上ノ表ニ記載シタル穿顎術施行ノ四十九例ハ千九百年 ヨリ千九百五年マテ即チ六年間ノ總數ニシテ分娩總數七 千百六十三人ナリ故ニ之ニ依リテ其割合ヲ計出スルトキ ハ〇、六八%ヲ得シ而シテ又之ヲ次ノ方法ニヨリ年別 トセバ	蓋 第二位頭 部位 Bossi氏鉗 子聴用トメ トロイリン テルチ用フ	第一頭 第二前 位 頭 ○ 疊ノ插入 更日以來陣痛様ノ シ静ニシテ心音ナ シ模様起シ強烈ノ日以降 ナク且心音ナ シ消失セリ	第二頭 第二前 位 頭 ○ 疊ノ插入 更日以來陣痛様ノ シ静ニシテ心音ナ シ模様起シ強烈ノ日以降 ナク且心音ナ シ消失セリ	身長三二仙 体重三〇五 瓦	身長三二仙 体重三〇五 瓦	死 ○瓦	身長五二仙 体重二九〇 瓦
年 度	分 娩 數	穿 顎 術	百 分 比	年 度	分 娩 數	穿 顎 術	百 分 比
1900	1425	11	0.77	1901	1154	9	0.78
1902	1172	7	0.66	1903	1201	7	0.58
1904	1018	6	0.59	1905	1193	7	0.50

一九〇〇 分娩數一四二五ノ中 穿顎術十一即〇、七七%

一九〇一年 一一五 全 九即〇、七八%

一九〇二年 一二七 全 九〇、七六%

一九〇三年 全 一四〇 全 七〇、五八%

一九〇四年 全 一〇一 全 六〇、五九%

一九〇五年 全 一一九三 全 七〇、五〇%

予ハ今以上ノ統計ヲ以テ次ノ如ク簡單ニ前年度ノ統計  
比較セント欲ス即チ千八百八十六年ヨリ尤十二年三回ル  
六年間ニ施セシ穿顎術ノ割合ハ〇、五四ニシテ又 Viktor  
Steiner 氏ベ彼ノ論文中ニヨンマツ大學婦人科クリニ

ツクニ於ケル千八百八十六年ヨリ九十二年間ニ施行セシ  
二十六例ノ穿顎術ハ〇、五四ノ割合ニ相當スルコトヲ報  
告セリ然ルニ千八百九十七年ヨリ十九年度ニ於ケル此  
間ハ未だ統計ヲ發見セザルヲ以テ予ハ此ヲ補欠シ且比較  
統計ヲ完全ナラシメンガタメニ我目的以外ニ脱スル恐ア  
レ単簡ニ次ノ數ヲ計上セリ

年 度	分 婦 數	穿 顎 術	百 分 比
1897	1149	4	0.35
1898	1240	8	0.64
1899	1350	11	0.82
1897-99	3739	23	0.62

又々更ハ前年度統計ヲ比較ヘムトキヤ

1886-1892.....0.54%  
1892-1896.....0.54%  
1897-1899.....0.62%  
1900-1905.....0.68%

依之觀察スルトキハ穿顎術ノ適用數ハ年ヲ追フテ益旺盛  
シナルガ如シ然レトモ之ノ絶体的ノ應用數トシテ結論ス  
ルコト能ハザルビシ何トナレバ此手術ハ公共的手術ニ於

## 校 友 會 雜 誌

ケルヨリモ臨床ニ多ク且容易ニ行ハル、モノナレバナ  
リ。次ニ余輩ハ前四十九例ニ就テ尙少シク詳細ニ之ヲ觀察セ  
ント欲ス骨性骨盤ノ異常アリシガタメ碎頭術ヲシテ直接  
間接ヲ問ハズ必要ナラシメタル場合十六例アリキ而シテ  
狹隘骨盤ハ多クハ幼時ノ佝僂病ノ結果來タリシモノニシ  
テ又或ル場合ニ於テハ恥骨内面薦骨岬ニ對峙スル所ニ骨  
腫ヲ形成シ其結果骨盤結合線僅カニ六、五仙迷トナリシ  
コトアリ而シテ之ノ手術ノ適用ハ四十九例中十一例ハ失  
敗ニ歸シ只八例ニ就テ成功シタリ

次ニ鉗子應用ヲ試験シタルニ十二回ニシテ二十二、五%  
ニ該當スルコトヲ知レリ尙骨盤狭小ハ三例(六、1%)ハ  
前頸頂骨位ノ結果來タリ五回即チ一〇、二%ハ顎面位ナ  
リキ又七例即チ一四、三%ハ生殖器ニ高度ノ浮腫ヲ起セ  
シノミナラス下肢及腹部ニモ亦浮腫ヲ起シタルヲ以テ止  
ムヲ得ヌ人工的挽出術ノ必要ヲ認メタリキ

又子宮ノ異常收縮ヲ起シ該收縮輪ガ臍部以上ニ達シ著シ  
キ子宮強直ヲ起シタルヲ以テ十一回即チ二十四%ハ穿顎  
術ヲ施サヘルベカラザリキ而シテ此中六回ハ胎兒既ニ死  
亡シ第五回ハ母体ヲ助ケンレシテ余義ナク胎兒ヲ犠牲ニ

供セザルヲ得ザリキ故ニ之等ノ點ハ道徳上及法律上ノ論議ヲ釀ス原因トナルモノニシテ各自ノ主義主張點ニ大ニ價值アル所ナリ。次ニ八例即チ一六、三%ニ於テハ体温上昇ヨリモ其他重大ナル疾病アリタメニ母体ノ情況詢ニ危險ナル位置ニアリシヲ以テ又穿顎術ヲ施行セリ。

又十一回即二二、四%ノ臍帶ノ脱出ヲ起シ而カモ脉搏ナク胎兒ノ死亡ヲ現ハシタルヲ以テ人工的分娩ヲ施シタリ第十四例及第十八例ニ於テハ胎兒ノ脳水腫ノ併發症アルヲ示シ而シテ前者ニアリテハ穿顎術ヲ施セシニ約二十時間ノ後怒責陣痛ヲ起シ胎兒及胎盤ノ自然ノ排出ヲ促シキ又第十八例ニ於テハ穿顎術ヲ施スニ先チ足位回轉術ヲ試ミシガ激烈ノ出血ニヨリ胎盤ノ擁手剝離法ヲ行ヒタリ然ルニ其際子宮ノ左半部ニ於テ長徑ノ虛裂アルコトヲ認メタリ加斯狀体ナルヲ以テ患者ハ直チニクリニツクニ收容セラレ茲ニPetro'sche Operationヲ受ケ良成績ヲ得タリ。

第七例ニ於テハ死胎ノ穿顎術及挽出術ヲ施シタル後尙第

又以上四十九例中其分娩數々檢スルニ其内二十四人ハ初二兒ノ殘存ヲ認メラレ依テ頭部挽出術ヲ試ミントセシモ子宮口狭窄ノタメ之ヲ切開セズンバ不可能ナリキ然レトモ僥倖ニシテ臍帶脉搏ナカリシヲ以テ穿顎術ヲ施シテ

挽出セシメタリ

第九例ニ於テハ六日間持続性ノ大出血ヲ起シ其間如何ナル方法ヲ施スモ出血ノ功ナク遂ニ重症ノ併發症ヲ起セリ而シテ尙其他種々複雑ナル手術ヲ施スモ到底内部ノ腐敗ヲ免ルベカラザリキ。

又十一例即チ二二、四%ニ於テ胎兒ハ手術前既ニ多クハ臍帶壓迫ノ結果死亡シタリ。次ニ予ハ只二回ノミ陣痛ノ安靜狀態アルヲ見タレトモ反作用アリシニモ拘ラズ種々ノ原因ニヨリ分娩不可能ナリキ而シテ胎兒ノ唯一例ヲ除クノ外スベテヨク發育シ四回ヘ腐蝕ニ陥リ其中一例ハ碎頭術ヲ施サザルベカラザリキ又胎兒ノ体重ヲ測定スルニ二千二百乃至四千四百六十瓦ノ間ニシテ身長四十七乃至五十九仙迷ノ間ヲ昇降ス然レトヨ体重ト身長トノ比較ハ各個人ニ就キ此終末ノ數ニ一致セザルコト勿論ナリ。

ヲ撿セシニ一名ハ六子ハ正規分娩ニヨリ一子ハ穿顱術ヲ施シテ分娩セリト云ヒ一人ハ七回ノ正規分娩ヲ遂ゲタリ上云フ而シテ此穿顱術ハ時トシテハ困難ヲ感ズルコトアリ即チ第三十八例ニ於ケルガ如ク其病症經過ニ就テハ唯大体ノ事柄ヲ記載スルニ止リ不明ナリシモ穿顱術ヲ施セシ後子宮破裂ヲ來タシ其結果開腹術ヲ附加セザルベカラザルニ至リ遂ニ手術後數時間ヲ經テ死亡シタル例アリ

又第二十五例ニアリテハ患者ハ病理解剖上脊椎前彎腰椎後彎及佝僂病性ノ胸廓ヲ有シ併ビニ又既往ノ疾患ニ微スルモ疑ハシキ患者ニシテ該患者ニ二回回轉術ヲ試ミタル者ニ無効ニ終ヘリ且加之浮腫及子宮攀縮ヲ起セリ依テ之ニ穿顱術ヲ施セシニ初メ起リシ虚脱症狀ハ之レヲ防止シ挽出術ヲ行フコトヲ得タレトモ其後數時間ヲ經テ又更ラニ

第二ノ虚脱症ヲ起シ遂ニ死亡セリ

次ニ又第十一例ニ於テハ出血アリテ嚴格ナル栓塞法ヲ施スモ之ヲ止血スルコト能ハズ遂ニ六日間持続性ノ出血ニヨリ子宮内ノ凝血ガ腐敗性ノ分解ヲ起シ遂ニ全身性ノ腐敗ヲ誘起セリ

其他ノ二十五例中十六回ハ回轉術ヲ試ミラレ其中十二回

ハ鉗子挽出法ヲ施サレタレトモ其ノ手術中一子ハ非常ニ軟化浸蝕ヲ受ケタルヲ以テ頭部ハ軀幹ヨリ離開シタリ鑽セラレ胎盤ハ其最大多數ノ場合ニ於テハ自然ニ排出セラレタリ然ルニ若シ自然ニ生レザリシ場合ニハタレードー氏法ニヨリ挽出セラレ唯二例ニ於テノミ兩手斬離法ヲ施サルベカラザリキ之レ即チ蔓延性ノ出血ニ結果セシガ爲ナリ尙産褥ノ經過ニ關シテハ三十四人ハ全々正規的ニシテ即チ全例ノ三分之二該當シ五例ハ悪寒戰慄ヲ認メ三例ハ卵巣炎ヲ起シ一例ハ大脛部ノ血栓ヲ生シタル尙本第二十一例ニ於テハ產後極メテ惡性ノ肺炎及腐敗性ノ子宮周圍炎ヲ起シ其症狀甚ダ複雜ニシテ經過一ヶ月ノ後尙惡露中ニ二連球菌及淋菌ヲ証明シタルキ然レトモ不幸ニシテ此患者ハ何時退院セシヤ不明ナリシヲ以テ其經過ヲ知ル能ハズ尙終リニ前表ニヨリ掲出セラレシガ如ク多クノ穿顱術數ヲ減少セントスル目的ヲ以テ千九百五年ヨリノムクリニシクニ於テ耻骨離開術 Pneostomie ヲ施行シタル事ハ

又趣味アル事ナム

予ハ茲ニ此章ヲ終ベシリ臨<sup>ム</sup>顧問醫 Von Winkel 氏<sup>ハ</sup>許可ヲ得テ同氏著產科學全書<sup>ヨリ</sup>甚<sup>タ</sup>趣味アル比較表即チ「諸國及病院ニ於ケル穿顱術ノ適應數ニ就テ」<sup>ヲ</sup>引用セシ

年 度	分娩總數	死 產	碎頭術		碎頭術 及截除術		碎 頭 術		頸頭術及截除術	
			死產百分比	分娩百分比	死產百分比	分娩百分比	死產百分比	分娩百分比	死產百分比	分娩百分比
1892	86565	3140	36	5	36.40	0.42	11.46	0.058	1.59	
1893	88100	3203	56	2	36.36	0.64	17.48	0.023	0.65	
1894	87317	3175	51	4	36.36	0.58	16.06	0.046	1.26	
1895	88184	3211	51	3	36.41	0.58	15.88	0.034	0.93	
1866	91673	3246	54	1	35.41	0.59	16.64	0.011	0.31	
1892-96	441539	15975	248	15	36.18	0.56	15.52	0.034	0.94	

以上ノ表ニ依リテ見ルトキハ斷頭術及截除術ハ千八百九

十二年ヨリ同九十六年ノ間分娩總數ト比較スルニ不絶

分娩總數トノ割合ハ殆ド同數ナリ而シテ又以上ノ觀察ニ曰

リ分娩總數四十四万一千五百三十九中一万五千九百七十五

ノ死胎分娩ヲ生シ其中三百四十八ガ碎頭術ヲ施サレタル

割合ニシテ尙之ヲ區分スルトキベタリシタニ於テ扱ヘシヨノ八十例普通醫ニ於テ扱ヘシモノ百六十八例ナリム

ト欲ス即チ Walthard 氏<sup>ハ</sup>論文トシテ一千八百九十二年<sup>ヨリ</sup>一九十六年間施行セラノタル少部分ノ碎頭術ノ統計アリ然レドモ此表ニ由ルモ當碎頭術ハ其全分娩數ト比較シテ決シテ真正ニ減少シタル者<sup>ヲ</sup>認ムカハズ

次ニ生胎ニ施サンタル碎頭術ハ同シタ該書中ニ記載セラレシ所ヘキノロ以本比較スルニ即チムラノン<sup>ム</sup>大學ニ於テハ四十九例中生胎ニ施セシモノ五例ナリキ

Münchensche Medizinische Wochenschrift 15 : 49 = 10%

Leipzig 21

Wien 72 : 232 = 31%

Berlin 45 : 233 = 19%

Halle 20 : 80 = 25 %

Budapest 20 : 46 = 43 %

Dresden (1883-87) 34 : 71 = 48 %

Dresden (1887-92) 41 : 131 = 34 %

Berlin-charlottenburg 91 : 168 = 48 %

予ハ此稿ヲ終ヘルリ臨々我最モ尊敬スル所ノ教授諸賢殊  
ニ顧問醫官 Winkel 君ノ此ノ著述ニ對シテ誠實ナル獎勵  
ヲ與ヘラシ且材料ノ供給ト讓與セラレタル好意ニ對シ茲  
ニ特記シテ感謝ノ意ヲ表ス

(○) 化學力學 Chemical-dynamics

藥學科二年級 荒川富太郎述

余ノ文ニ於ケル拙ニシテ殊ニ淺薄ナル頭腦ヲ以テ斯ル大  
問題ヲ捉ヘテ論述スル或ハ會友諸君ノ早クモ跳渠ト胥セ  
ラル、人モアル可ケレドモ如何セン化學力學ハ一般科學  
ヲ學ブ人々ニ取りテハ頗ル適切ニシテ特ニ之ノ觀念ナカ  
ル可カラザルガ故ニ茲ニ本誌ノ餘白ヲ借ル、コトニセリ  
化學力學ハ便宜上次ノ如ク分類シテ各論ス可シ

- I. Chemical kinetics
- II. Chemical equilibrium.

III. Dissociation

IV. Application of thermodynamics to chemical equilibrium

V. Application to the kinetic molecular theory to chemical equilibrium.

(1). 化學動力學 Chemical kinetics

化學變化ノ速度 Velocity of chemical changes  
化學的變化ノ進行ノ何ニタルコトヲ知ラハヌベルニ先タ  
チテ茲ニ知ラザル可カラザル處ノ一大緊要ナル化學法則  
ノ存スルモノアリ

西曆一千七百七十七年ニ於テ C. F. Wenzel 氏ハ始メテ  
化學的反應ノ進行ノ原因及ヒ化學的親和力 Chemical affinityノ法則ヲ發見セント欲シテ百方斯學ニ就キテ  
研究スル所アリ爾后十九世紀ノ初年ニ於テ Berthelot 氏  
出デ、同ジク之レガ研究ニ從事セリ同氏ハ化學的反應ノ  
速度ハ之レニ與カル物質ノ性質及ヒ溫度壓力等ノ影響ヲ  
被ル外其ノ物質量ニモ大ニ關係スルコトヲ斷定シ互ニ反  
應スル物質ヲ混和スレバ化學的變化ノ進行スルニシテ  
其ノ量減却シ反對ニ新生物ノ量ヲ漸次增加シテ正作用  
Direct reaction ヲ妨害シ遂ニ化學的平衡 Chemical equi-